

老子と『道德経』及び「環境問題」の解決(Ⅳ)

——『道德経』における「道」

耿 順

一 概念としての「道」

1. 書き方の変遷

人類には、その思考能力の発達に伴って自分の考えなどを遺したり仲間への意思を伝達する必要性が発生する。これに基づき、そのための手段として文字が創り出される。この基で、今日漢字と呼ばれている文字は、その形成過程を見ると、いわゆる単純な符号も含めて一万年以上の歴史があった。

また、単純な意思を表す符号などを除き、一般的に一定の意味(一概念)を表す文字として商王朝の文字(約 3500 年前後の甲骨文)から次第に周王朝(約 3100 年前後主に青銅器に鑄込んだりする金文など)の文字→春秋戦国時代(約 2500 年前後韓・趙・魏・斉・楚・燕など)の文字→秦王朝(約 2200 年前統一された篆書)の文字→現行漢字(繁体字及び 1950 年代からいわゆる異体字に対して統一された文字と書き方として簡略化された簡体字がある。)へと変化してきた。

この変化の原因を考えてみると、それは思考能力の発達によってもたらす思想の文字化及び社会発展によって文字利用における社会化と政治的な統一化の二つあると言える。具体的に言えば、今日よく使われている「道」という文字は、筆者が利用している関係辞書及び著作などにおいて「道」・「導」・「道」・「術」・「術」・「術」・

「術」・「導」・「導」など 20 種類以上の書き方があると数えられる。なお、『道德経』の「通行本」にはその時代によって多くの書き方の「道」、『帛本老子』には「道(道)」、『簡本老子(甲)』には「道」と「道」が使われている。

この状況から見て、今日まで「道」に対する表し方は、時代に伴って変化しているとのことが分かる。

2. 意味の多種多様

漢字は、他の文字と違い、見ると分かるように、それが生まれ付き持つ構成要素の多少及び構成状態などによって表す意味がある。即ち、象形や表意などの機能を有している。

また、元々符号から発展されてきた文字であるため、その構成要素が多ければ多いほど、表す意味が複雑になる。これにより、表意においては、構成要素が多ければそれによって表す意味の抽象程度が高くなり、含められる意味が深くなる。そして、これと同時に、理解における難しさの増加につれて客観性が減少し、主観性が増加してくる。なお、その文字は、創り出した人に入れられているイメージを含むだけであって、定義されることがない。

これにより、その文字自身の形で意味が表され、見る(読む)人にとってその個人なりの理解になるのである。なお、長い歴史において一文字(概念)は創り出された

後、使う人の増加及び時代の変化などによって創り出した人の意味で使うことではなく、一知半解で使われたり、又はその意味を拡大縮小して使われたりすることなどで、次第に後世にとって複雑な概念、乃至原意を知り難くなる概念になるのである。

例えば、「道」という概念は、今日『漢語大字典』(四川・湖北辞書出版社 1990年6月)では、発音によって二項目を設けて45種の異なる意味の用例を挙げて解説されている。また、異文化間の交流なども考えると、その状況はさらに大きく難しくなるのである。例として、中国で誕生した「道」について、手元の『新明解漢和辞典』(第四版 1995年1月)は11種の意味を列べて解説している。勿論、どの国にせよ、辞書より「道」という概念を実際に使う人が大勢いるだろう。

このように見れば、今日においては、「道」という概念は創り出された後、時代の変化につれて広い地域で大勢の人々の様々な使い方による多くの派生的な意味を含んでいることが分かる。

3. 魅力

「道」は、概念として何のために何時、何処で、誰に創り出されてきたかについては、今日では具体的に何も分からない。だが、一文化の現象として、即ちその象形と表意の構成要素から推測すれば、だいたいその基本的な意味を理解できるのではないかと思う。例えば、今日の「道」については、「𡗗」は「𡗗」(十字路の真ん中に止める人(止=脚)状況を表す象形表意の甲骨文、*chuò*と発音。)→「𡗗(辵)」(十字路の右半分のない状態)¹⁾から、「首」は「𡗗」(頭を表す象形表意の甲骨文)→「𡗗」(同じ意味の金文)→「𡗗」(同じ意味の小

篆)²⁾から省略、規範化されてきたと考えられる。また、『簡本老子(甲)』に使われる「𡗗(辵)」は、その左側の「彳」として「𡗗」(*chi*と発音、十字路の左半分を表す象形表意の甲骨文)→「𡗗」(同じ意味の金文)→「𡗗」(同じ意味の小篆)³⁾から、真ん中の「人」として「𡗗」(『簡本老子』における人を表す象形表意の古文字)から変形、規範化され、右側の「辵」としても十字路の右半分を表していると考えられる。

こうして、今日の「道」によって統括された「𡗗」や「𡗗」などは、囲まれている環境の状況が違っても、基本的に同じであって、即ちそこ(当時)から次の入り口(未来)に対する選択に直面している立場にすることに違わないのである。

この意味で、数千年にも渡ってこの「道」は研究され追求されてきたと思われる。言い換えれば、これは「道」の原意ではないかと思う。これにより、十字路に立ち、又は十字路に立つ人類を見ている人々は、それなりの熱情を持ち、乃至堅忍不拔と不撓不屈の精神によって「道」を探求することがある。これは、今日に至り、道家や道教及び新道家などの研究や追求の専門的な団体でさえも形成されてきた。

この状況により、「道」は一見して単なる一文字であるけれども、創り出されてくる時から今日までの長い歴史に変わりがなく、社会で広く使われ、探求され、追求されることを見れば、それに含まれている魅力などが分かる。また、他には例を見ないことである。

二 老子の「道」

老子の「道」という概念は、後に名付けられた『道德経』という文章のタイトルで示されているように、その思想全体を含めてい

る概念であると言える。そのため、この「道」は、6000字に足りない「通行本」に80回近く使われ、やや字数が多い「帛本老子(甲・乙)」に70回以上見られ、約2000字の「簡本老子(甲・乙・丙)」に26回も現れている。

次には、一番古い「簡本老子(甲・乙・丙)」におけるいわゆる「環境問題」の解決に関係する内容について、文章の段落のもとで簡単に検討してみる。

1. 「道」とは⁴⁾

原文⁵⁾: 有物混成, 先天地生, 敝穆独立不改, 可以为天下母。未知其名, 字之曰道, 吾強为之名曰大。大曰逝, 逝曰远, 远曰返。天大, 地大, 道大, 王亦大。国中有四大焉, 王居一焉。人法地, 地法天, 天法道, 道法自然。(甲)

訓⁶⁾: 状の混成する有り。天地に先んじて生ず。悦穆(えっぼく)として独り立ちて改めず。以て天下の母と為す可し。

未だ其の名を知らず。これに字(あざな)して「道」と曰う。吾強いてこれが為に名づけて「大」と曰う。「大(だい)」は「逝(せい)」と曰い、「逝」は「遠(えん)」と曰い、「遠」は「反(はん)」と曰う。

天は大、地は大、道は大なり、王も亦大なり。国中に四大有り。案(すなわ)ち王は一に居れり。

人は地を法とし、地は天を法とし、天は道を法とし、道は自然を法とす。

検討: ①「状」について、次のことは言明している。それは天地より先に誕生し、絶対的に他の全てを超える立場を続け、天下の万物の母親であると言える。だが、残念ながら名が付けられていないので、字として「道」と言う。さらに、強いて「大」と名付け、そしてこの「大」を「逝」と、「逝」を「遠」と、「遠」を「返」と言う。それで、考え

るように見て「大」を「逝」と、「逝」を「遠」と、「遠」を「返」と言う。

②「国」における天地道人(王は天地道に対する人に等しい)という四大物の一としての人類の自然位置を明らかにしている。

③天地道人の一としての人(類)から見て、人は地を法とし地は天を法とし天は道を法とし道は自然を法とするという「自然を法とする」関係があることを示している。

以上の理解のもとで見れば、今日の間は「状」と「国」に等しい「環境」をよく知っていないと言える。それにより、「自然を法とする」人ではなく、物質享受の貪欲に基づく経済的人間として「環境」を破壊している。そうであるけれども、「環境」を保護すると言っている人もいるので、いわゆる「環境問題」は酷くなる一方である。

2. 「道」の所在

原文: 天地相会也, 以逾甘露。民莫之命, 天自均安。始制有名。名亦既有, 夫亦将知止, 知止所不殆。譬道之在天下也, 犹小谷之与江海。(甲)

訓: 天地の相合うや、以て甘露を輸(もたら)す。民これに命ずること莫(な)くして、而も自(み)ずから均(ひと)し。

始めは名を有するを制し、名亦既に有れば、夫れ亦将に止(や)むることを知らんとす。止むることを知るは、殆(あや)うからざる所以(ゆえん)なり。譬(たと)えば道の天下に在(お)けるや、猶お小谷の江海に与(お)けるがごとし。

検討: 天地の交わることによって甘露が生じ、この甘露は民(人間)から命ずる必要が無く、天が自然に全体に与えることを説明している。

また、名がなければ制することはできないけれども、誤りを無くすため名に止まる

必要があることを知るべきであると示している。なお、「道」の存在は人間にとって毎度の適度な行動であり、これは溪流から大海になるようなことであると説いている。

このように理解して、天地による甘露（自然物）は人間によって分ける必要が無く、全員が自然に与えられるものである。しかし、今日の現実としては、文明や進歩の美名のもとに、強権に基づく特権がその物も含めて全てに所属する自然物を開発して全体の環境を破壊している。まして、度が無く、枯渇までにしなければ決して止められない状況にある。この状況は、まさに「道」があることより、「魔」が横暴していることである。

3. 「道」の特質

原文：道恒亡为也，侯王能守之，而万物将自化。化而欲作，将镇之以亡名之朴。夫亦将知足，知足以静，万物将自定。（甲）

訓：道は、恒に為す無きなり。

侯王能くこれを守れば、万物将に自（おの）ずから化せんとす。化して而も作（おこ）らんと欲すれば、将にこれを鎮（しず）むるに無名の樸（ぼく）を以てせんとす。

夫れ亦将に足るを知らんとす。足るを知られば以て静まり、万物将に自ずから定まらんとす。

検討：「道」が常に為すことを無くしており、侯王がこのようにできたら万物は自ずから発展変化し、人間には行き過ぎることがあるけれど、特別になる前に止めるようにすれば問題が発生しないと説いている。

また、満足を知る必要があり、それにより人間は落ち着くし、万物は乱れることがないと説明している。

こう見れば、今日の「環境問題」の発生原因は、まず「侯王」が無為の「道」を為していないことにある。そのため、様々な「環境問題」が発生して人類が四面楚歌の境地に陥ってしまったのである。

4. 大「道」

原文：執大象，天下往。往而不害，安平大。乐与饵，过客止。故道之出言，淡呵其无味也。视之不足见，听之不足闻，而不可既也。（丙）

訓：大象を執（う）えて、天下に往く。往きて而も害あらず。安・平・大なり。

楽と餌とあれば、過客止まる。

故に、道の言に出すや、淡兮にして其れ味無きなり。これを見れども見るに足りず。これを聴けども聞くに足りず。而も既（つ）くす可からざるなり。

検討：大象を執れば天下（万物）が従い、これにしても害が無く安・平・大となり、なお楽と餌があれば通る人が寄り、これに対して「道」が説明されても美味しさを感じたり明らかに見られたりはっきり聞かれたりすることができないけれど離れてはいけなさと、例を挙げ比較して「道」の特徴を説いている。

このもとで考えてみれば、今日の「環境問題」をもたらす「餌」などを利用して横暴的に開発や建設などの活動が一般的なことになっていることは、当然「大象」を執り、「道」を離れない反面、私的な目先の利益を追求していることになっているのが分かる。

5. 人間における「道」

原文：上士闻道，勤能行于其中。中士闻道，若闻若亡。下士闻道，大笑之。不大笑，不足以为道矣。是以《建言》有之：明道如費，夷道如类，进道若退。上德如谷，大白如辱，广德如不足，建德如偷，

質真如渝。大方亡隅，大器慢成，大音傲声。天象亡形，道隱无名。夫唯道善始且善成。(乙)

訓：上士道を聞けば、謹んで能く其の中に行う。中士道を聞けば、聞くが如く亡(な)きが若し。下士道を聞けば、大いにこれを笑う。大いに笑わざれば、以て道と為(な)すに足らず。

是(ここ)を以て建言これ有り。明るき道は費(くら)きが如く、夷(たい)らかなる道は類なるが如く、進む道は退くが如し。

上徳は谷の如く、大白は辱(けが)れるが如く、広徳は足らざるが如し。建徳は偷(かりそ)めなるが如く、質真は渝(かわる)が如し。

大方は隅(すみ)亡(な)し。大器は慢(おそ)く成り、大音は希(かす)かなる声にす。天象は形亡(な)く、道は隠れて名亡し。

夫れ唯道は善く始み善く成る。

検討：「道」に対する人間の態度を三種に分け、その特徴を挙げて説明している。なお、昔の言い方を借りて通常のことと正反対である「道」の特徴を説き、そしてそのもとでの徳などの特徴としても逆に見られると示している。

特に、大物にはその特質によって成り難いけれども、ただ「道」はそれらに対して善く始められ善く成りやすい特徴を明らかに説いている。

これらに照らして見ると、「環境問題」の解決には次の幾つかのこと(など)がある。

① 「環境問題」の解決に、それを解決することより造らないことが最高の解決策であるとの見方は、笑われる。

② みんなのためと主張しながらみんなの生活と生存の環境を破壊している様々な活動があるけれども、それは「環境問

題」とされていない。

③ 自然に従えば、「環境問題」を造る苦労もなく「環境問題」を解決する必要もなくなるが、そうする人がなかなか生じてこない。

三 まとめ

以上のように、今日のような「環境問題」を前提にして、老子の「道」について全体的に検討し、そのもとで具体的な「環境問題」を照らして論理的に分析せず、単なる幾つかの段落の論理だけによって検討することなどは、けっして十分の方法ではない。ところが、簡単な検討によって老子の「道」に従って「環境問題」の解決は、決して困難なことではないことが分かったと言える。従って、課題としては、どうしたらその「道」に従うことが実現できるかのことである。

脚注)

¹⁾ 潘自由『漢字部首浅析』内蒙古科学技术出版社 1997 年。

²⁾ 左安民・他『細説漢字部首』北京九州出版社 2005 年。

³⁾ ②と同じ。

⁴⁾ 便宜上で筆者が付けたもの。

⁵⁾ 原文に対する理解の間違いによる悪影響を減少するため付けた。

⁶⁾ 日本語の訓は、小池一郎「郭店楚簡『老子』校注(上・下)」(同志社大学言語文化学会「言語文化」5—3(2003 年)と6—3(2004 年))一部を参照、引用している。